

[illegible]

漱石全集
第六卷

心

道草

昭和四十一年五月二十三日 第一刷發行
昭和六十年三月二十二日 第三刷發行

漱石全集 第六卷 心道草

定價 三千五百圓

著 者

夏 目 漱 石

發 行 者

綠 川 亨



發 行 所

株式會社
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

こゝろ

三

上 先生と私

五

中 兩親と私

一〇二

下 先生と遺書

一五〇

道草

二八九

解説

五九三

注解

六二二

こ

ゝ

ろ

大正三、四、二〇—三、八、二一

上 先生と私

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からは是非来いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二三日を費やした。所が私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に勸まない結婚を強ひられてゐた。

彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとう／＼歸る事になつた。折角來た私は一人取り殘された。

學校の授業が始まるにはまだ大分日數があるので、鎌倉に居つても可し、歸つてもよいといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中國のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私とさう變りもしなかつた。従つて一人坊ちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒も有たなかつたのである。

宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別荘は其所此所にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めてゐた。

私は毎日海へ這入りに出掛けた。古い燵より返つた藁蓐の間を通り抜けて磯へ下りると、此邊にこれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢

湯の様に黒い頭でごちや／＼してゐる事もあつた。其中に知つた人を一人も有たない私も、斯ういふ賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寐そべつて見たり、膝頭を波に打たして其所いらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は實に先生を此雑沓の間に見付出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會から其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊に大きな別荘を構へてゐる人と違つて、各自に専有の着換場を拵えてゐない此所いらの避暑客には、是非共斯うした共同着換所といった風なものが必要なものであつた。彼等は此所で茶を飲み、此所で休息する外に、此所で海水着を洗濯させたり、此所で鹹はよい身體を清めたり、此所へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。

二

私が其掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いで是から海へ入らうとする所であつた。私は其時反對に濡れた身體を風に吹かして水から上つて來た。二人の間には目を遮ざる幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程濱邊が混雑し、それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず、私がすぐ先生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴

れてゐたからである。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着てゐた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼是我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其二日前に由井が濱迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍がホテルの裏口になつてゐたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が塩を浴びに出て來たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は殊更肉を隠し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃した許の私の眼には、猿股一つで濟まして皆なの前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧りみて、其所にこゝんでゐる日本人に、一言二言何か云つた。其日本人は砂の上に落ちた手拭を拾ひ上げてゐる所であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。其人が即ち先生であつた。

私は單に好奇心の爲に、並んで濱邊を下りて行く二人の後姿を見守つてゐた。すると彼等は眞直に波の中に足を踏み込んだ。さうして遠淺の磯近くにわい／＼騒いでゐる多人數の間を通り抜けて、比較的

廣々した所へ來ると、二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小さく見える迄沖の方へ向いて行つた。夫から引き返して又一直線に濱邊迄戻つて來た。掛茶屋へ歸ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身體を拭いて着物を着て、さつさと何處へか行つて仕舞つた。

彼等の出て行つた後、私は矢張元の床几に腰を卸して烟草を吹かしてゐた。其時私はぼかんとしながら先生の事を考へた。どうも何處かで見た事のある顔の様に思はれてならなかつた。然し何うしても何時何處で會つた人か想ひ出せずに仕舞つた。

其時の私は屈托がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。それで翌日も亦先生に會つた時刻を見計らつて、わざ／＼掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は來ないで先生一人麥藁帽を被つて遣つて來た。先生は眼鏡をとつて台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すた／＼濱を下りて行つた。先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けなくなつた。私は浅い水を頭の上迄跳かして相當の深さの所迄來て、其所から先生を目標に拔手を切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。私が陸へ上つて雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入と、先生はもうちゃんと着物を着て入違に外へ出て行つた。

私は次の日も同じ時刻に濱へ行つて先生の顔を見た。其次の日にも亦同じ事を繰り返した。けれども物を云ひ掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて行つた。周圍がいくら賑やかでも、それには殆んど注意を拂ふ様子が見えなかつた。最初一所に來た西洋人は其後丸で姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或時先生が例の通りさつさと海から上つて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着やうとすると、何うした譯か、其浴衣に砂が一杯着いてゐた。先生はそれを落すために、後向になつて、浴衣を二三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白絣の上へ兵兒帶を締めてから、眼鏡の失くなつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受取つた。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。さうして先生と二所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。廣い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしてゐた。私は

自由と歡喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ぱたりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寐た。私も其眞似をした。青空の色がぎら／＼と眼を射るやうに痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな聲を出した。

しばらくして海の中で起き上がる様に姿勢を改めた先生は、「もう歸りませんか」と云つて私を促がした。比較的強い體質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ「えゝ歸りませう」と快よく答へた。さうして二人で又元の路を濱邊へ引き返した。

私は是から先生と懇意になつた。然し先生が何處にゐるかは未だ知らなかつた。

夫から中二日置いて丁度三日目の午後だつたと思ふ。先生と掛茶屋で出會つた時、先生は突然私に向つて、「君はまだ大分長く此所に居る積ですか」と聞いた。考のない私は斯ういふ問に答へる丈の用意を頭の中に蓄えてゐなかつた。それで「何うだか分りません」と答へた。然しにやにや笑つてゐる先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなつた。「先生は？」と聞き返さずにはゐられなかつた。是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。

私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違つて、廣い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。其所に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生々々と呼び掛けるので、先生は苦笑ひをした。私はそれが年長者に對する私の口癖だと云つて辯解した。私は此間の西洋人の事を

聞いてみた。先生は彼の風變りの所や、もう鎌倉にゐない事や、色々の話をした末、日本人にさへあまり交際を有たないのに、さういふ外國人と近付になつたのは不思議だと云つたりした。私は最後に先生に向つて、何處かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても思ひ出せないと言つた。若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた。さうして腹の中で先生の返事を豫期してかゝつた。所が先生はしばらく沈吟したあとで、「何うも君の顔には見覺がありませぬね。人違ぢやないですか」と云つたので私は變に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ歸つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜ござんすか」と聞いた。先生は單簡にたゞ「えゝ入らつしやい」と云つた丈であつた。其時分の私は先生と餘程懇意になつた積でゐたので、先生からもう少し濃かな言葉を豫期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。先生はそれに氣が付いてゐる様でもあり、又全く氣が付かない様でもあつた。私は又輕微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く氣にはなれなかつた。寧ろそれとは反對で、不安に搖かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前

へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて來た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々素氣ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠けやうとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づくやうとする人間に、近づく程の價値のないものだから止せといふ警告を與へたのである。他の懐かしみに應じない先生は、他を輕蔑する前に、まづ自分を輕蔑してゐたものと見える。

私は無論先生を訪ねる積で東京へ歸つて來た。歸つてから授業の始まる迄にはまだ二週間の日數があるのだ、其うちに一度行つて置かうと思つた。然し歸つて二日三日と經つうちに、鎌倉に居た時の氣分が段々薄くなつて來た。さうして其上に彩られる大都會の空氣が、記憶の復活に伴ふ強い刺激と共に濃く私の心を染め付けた。私は往來で學生の顔を見るたびに新しい學年に對する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一ヶ月ばかりすると私の心に、又一種の弛みが出來てきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しさうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私は又先生に會ひたくなつた。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えてゐる。晴れた空が身に沁み込むやうに感ぜられる好い日和であつた。其日も先生は留守であつた。鎌倉にゐた時、私は先生自身の口から、何時でも大抵宅にゐるといふ事を聞いた。寧ろ外出嫌ひだといふ事も聞いた。二度来て二度とも會へなかつた私は、其言葉を思ひ出して、理由もない不満を何處かに感じた。私はすぐ玄關先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇して其所に立つてゐた。此前名刺を取次いだ記憶のある下女は、私を待たして置いて又内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て來た。美しい奥さんであつた。

私は其人から鄭寧に先生の出先を教へられた。先生は例月其日になると雜司ヶ谷の墓地にある或佛へ花を手向けに行く習慣なのださうである。「たつた今出た許りで、十分になるか、ならないかで御座います」と奥さんは氣の毒さうに云つて呉れた。私は會釋して外へ出た。賑かな町の方へ一丁程歩くと、私も散歩がてら雜司ヶ谷へ行つて見る氣になつた。先生に會へるか會へないかといふ好奇心も動いた。夫ですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側から這入つて、兩方に楓を植ゑ付けた廣い道を奥の方へ進んで行つ